

ユダヤ人と日本の関係 (614号)

2025年 8月 石館

前 613号でパレスチナ国家承認問題について書いたが、その際日本とユダヤ人についてほとんど触れなかったのが、以前も書いたこととも重複しますが、樋口季一郎中将を中心にお話しします。

ユダヤ人を救ったと言えば、杉浦千畝が有名であるが、ユダヤ人難民を救ったのは杉浦千畝だけでなく、樋口中将も忘れてはなるまい。



北部軍司令官時代の樋口 (昭和18年頃)

生誕 1888年8月20日
● 日本・兵庫県三原郡本庄村上本庄 (町村制後：阿万村、現：南あわじ市阿万上町字戈の鼻)
死没 1970年10月11日 (82歳没)
所属組織  大日本帝国陸軍
軍歴 1906年 - 1945年
最終階級  陸軍中将

こういう小生も杉浦千畝のことは若い頃から名前だけは知っていたが、樋口中将のことは恥ずかしながら、つい最近知ったばかりである。

樋口中将のことを調べてみると、その功績に比べ、あまりにも世の中に知られていないことに驚く。その功績は多くのユダヤ人の命を救った、キスカ島の撤退作戦で海軍と協力5000人弱の兵士の命を救った、北海道をロシアによる占領を未然に防いだ、などがある。

樋口は1909年、陸軍士官学校(第21期)に進む一方東京外国語学校でロシア語を徹底的に学ぶ。その後陸軍大学校を経て、ロシア語が堪能であることもあって、卒業後すぐ1919年にウラジオストックに赴任。満州、ロシア(ソ

ビエト連邦)方面部署を転々と勤務。その時の経験が陸軍随一のロシア通として占守島のロシア軍の動きを察知し、ロシアによる北海道占領の企てを未然に防いだことに繋がった。

1937年第一回極東ユダヤ人大会が開かれた際、関東軍の認可の下で開催された同大会に、陸軍は“ユダヤ通”の安江陸軍大佐をはじめ、当時ハルピン陸軍特務機関長を務めていた樋口(当時陸軍少将)らを派遣した。この席で樋口は、前年に日独防共協定を締結したばかりの同盟国であるナチ党政権下のドイツの反ユダ

ヤ政策を、“ユダヤ人追放の前に、彼らに土地を与えよ”と間接的に激しく批判する祝辞を行い、列席したユダヤ人の喝さいを浴びた。こうした状況下 1938 年 3 月、何千人というユダヤ人（人数については諸説あり）がドイツの迫害下から逃れるため、ソ連国境沿いにあるシベリア鉄道・オトポール駅まで逃げて来ていた。



矢印の先がオトポールとハルピン

しかし、亡命先である米国の上海租界に到達するために通らなければならない満州国の外交部が入国の許可を渋り、彼らはマイナス 30 度の酷寒の中、足止めされており、そのままでは全員凍死してしまう危機にあった。

極東ユダヤ人協会の代表カウフマン博士

から相談を受けた樋口はその窮状を見かねて即日ユダヤ人への給食と衣料・燃料の配給、そして要救護者への加療を実施。さらに膠着状態にあった出国の幹旋、満州国内への入植や上海租界への移動の手配等を行った。また樋口は満鉄の総裁であった松岡洋祐に直談判し了解を取り付け、満鉄の特別列車で上海に脱出させた。（ただ本当にこのようなことがあったのか異説もある）

余談になるがちょうどこの頃父親の仕事の関係で小生一家がハルピンに居り、次第に戦況が切迫してきたので、1939 年末小生が母親のお腹の中にいるとき荒れた玄界灘を渡り帰国した。もう少し滞在していたら小生は中国生まれになっていた。

樋口は 12 両編成の特別列車を 13 本仕立て、ハルピンに送り、食事も避難宿舎も提供した。その後それがドイツから問題とされたが、これは人道上の問題と反論。樋口の上司で後に首相になる東条英機関東軍参謀長も“当然なる人道上の配慮による発言”とドイツの抗議を一蹴した。

当時の陸軍はヨーロッパで圧倒的な力を発揮しているドイツ軍になびく連中が多く、樋口の発言を問題視する人間も多かったが、東条の樋口を擁護する発言で

樋口を非難する声も次第に収まった。このオトポール事件で、必ずしも評判の良くない東条英機や国際連盟を脱退したときの首席全権松岡洋祐が樋口の説得があったにせよ、ユダヤ人救出で英断を下したことは記憶に残されなければなるまい。

樋口がユダヤ人救出にここまで協力したのは、若い頃ポーランドに駐在武官として赴任していた時、ユダヤ人たちと親交を結び、また彼らに助けられ、さらに37年にドイツに短期駐在して、ナチスの反ユダヤ主義に強い疑念を抱いていたから、といわれる。



樋口が1925年ポーランドに駐在武官として赴任した時、他国の駐在武官との写真（前列右端）

1939年、欧州で第二次大戦が勃発し、40年9月、日独伊三国同盟が調印されたが ベルリン、プラハ、ウィーン

に居た日本の領事担当者たちは、その後も引き続き日本の通過査証を発給し続けた結果、多くのユダヤ人がナチスの迫害から救われた。ユダヤ人に対しては、ホロコーストで600万人近いユダヤ人を強制収容所で死亡させたドイツとは全く別の政策を取った。



東洋のシンドラー 杉原千敏の「人道精神=人が人を大切に思う ...」

リトアニアのカナウスで40年7月から杉浦代理大使が発給した“命のビザ”も“杉浦大使の独断ではなく、“ユダヤ人対策要綱”の訓令に基づくものだったようだ。ただ領事館閉鎖という緊急事態で、ユダヤ人に通過ビザを発給し続けた姿勢は、人道主義の見地から高く評価されなければならない。

さらに杉浦は“命のビザ”発給を独断でやったので、外務省を追われたとの話があり、外務省の立場からして、そうであろうと信じられているが、実際は良く分からないがそうでもなさそうだ。ただビザを発給する条件として“最終目的地の入国ビザ”“旅行費用の保障”を確認しなければならないことを時間もないし、人手

もないことから割愛したことで本省から叱責されたことはあったようだ。杉浦は戦後外務省を依願退職したが、これは敗戦で外務省が大幅リストラを余儀なくされたからだった。

樋口に話は戻るが、太平洋戦争開戦の翌年 1942 年 8 月、札幌に司令部を置く北部軍の司令官として北東太平洋陸軍作戦を指揮。日本軍が重要視していなかったアメリカ領アリューシャン方面の戦いも、1943 年に入るとアメリカ軍が反攻に転じ、激しい戦いが行われた。



全員玉砕したアッツ島

撤退に成功したキスカ島

赤矢印の先は最後の戦闘がロシアと行われた占守島

大本営がアッツ島守備隊の増援要請を拒否し守備隊を見捨てることを決

定したとき、一説には、樋口はその決定に激怒したとも言われているが、守備隊の降伏を認めるといった措置を取ろうとした形跡は見当たらない。かえって北方軍司令部はアッツ島守備隊に対し、米軍相手に善戦し玉砕する覚悟を望むとの電文を送っている。

そのころ南太平洋諸島、ガダルカナル島、ブーゲンビル島などでも米軍の反攻により玉砕する島が増えており、アッツ島で降伏をさせようとの考えは、大本営になかったと思われる。結局アッツ島の守備隊は玉砕してしまったが、隣のキスカ島に存在していた陸軍、海軍ほぼ同数総勢 5000 人の守備兵は陸軍樋口中将、海軍木村少将の緊密な連携の下奇跡的に無血撤退に成功した。

もともと北部軍では対ソ戦を主に戦略が構想されていたが、太平洋戦争半ばころから対米戦を主と考え、特に米軍が直接北海道に来ることを樋口は懸念していた。樋口自身の戦後の遺稿によれば、ソ連軍は太平洋戦争の状況次第では南樺太に必ず進出してくると信じていた、

占守島の戦いは、昭和 20 年 8 月 17 日 23 時頃、日本の第 5 方面軍が守る占守島

にソ連軍が奇襲上陸することから始まった、8月15日に終戦となり、その後に火蓋が切られた戦いであった。終戦に乗じて火事場泥棒のように日本の領土を奪おうと国境の島に攻め入ってきたソ連軍を日本軍が迎え撃った防衛戦で、この小さな島の戦いは、日本の圧倒的な優勢で推移したが、停戦協定を締結するに至り、8月23日に日本軍は武装解除となった。



占守島の戦い

その後、戦った将兵はシベリアに抑留され、3年以上に及ぶ過酷な労働を強いられ、多くの命が失われた。

この戦いで日本が負けていたなら、その勢いでソ連は北海道まで侵攻していたであろう。下手すれば、日本はドイツのような分断国家となって、仙台は北日本共和国の首都になっていたかもしれない。

樋口中将は、陸軍きってのロシア通と言われ、情報に基づいた合理的かつ冷静な考えの出来る将であった。ソ連が攻めてきたとき、樋口中将は、ソ連ならこの機に乗じて攻めてきてもおかしくないと考え、戦闘開始を即断した。樋口中将の素早い確かな判断によって、日本は分断を免れたと言っても過言でない。

ソ連軍はこの戦いで思惑を打ち碎かれ、戦後、これを根に持ったソ連は、樋口中将を戦犯に指名しGHQに引き渡しを要求した。その時ニューヨークに本部を置く世界ユダヤ教会が動いた。GHQに対して“樋口季一郎の救済”を求めたのだった。オトポール事件の恩返しである。樋口は、無事にその人生を全うして1970年10月、82歳で逝去した。